CityLife Special Interview

7月22日(土)開催！ 情熱大陸ライブ2017

2001年から毎年開催されている「情熱大陸ライブ2017」が7月、万博記念公園で開催される。ヴァイオリニストの葉加瀬太郎さんがホストを務め、さまざまなジャンルのミュージシャンが一堂に介して行われる野外音楽フェスティバル。その魅力やライブにかける思いについて、葉加瀬さんにお話をうかがった。

取材・文 山本佳弥

葉加瀬 太郎(はかせ たろう)
1968年大阪府吹田市生まれ。東京芸術大学在学中の1990年に「クライズラー&カンパニー」を結成しデビュー。1996年にはセリーヌ・ディオンのワールドツアーに参加するなど、世界的なヴァイオリニストとして活躍。

極上の音楽が楽しめる「ピクニック」

2015年に葉加瀬さんがデビュー25周年を迎え、情熱大陸ライブも今年で16年目となる。「このライブを始めた時は33歳、今はもう50歳の手前です。年々規模は大きくなっているし、気候も暑くなっているし、とにかく何とかやりきろうという感じ。一番変化したのは体力ですね(笑)」。

しかし一方で、根底にはずっと変わらない思いを持ち続けている。

「16年前から夏の音楽フェスは多かったのですが、ほとんどが都心部から離れた場所で開催されていて、ロックやポップやジャズなど、比較的ジャンルやカテゴリに区別されていた。だから、ファンも同じような世代の同じような音楽を好きな人たちが集まる。僕は逆の発想で、街中から日帰りで行けて、友達や恋人や家族がピクニックのような感覚で参加できる『音楽のお祭り』をやろうと考えました」。音楽でお祭りを、という思いで始まった情熱大陸ライブ。それは、リオのカーニバルのイメージに近い。

「リオのカーニバルだってもともと、人種差別への抗議のために10人くらいの少人数で始まったもの。今ではお祭りを目的に、世界中からたくさんの人が一つの町にやってくる。それが素敵だな、と。そういうことを、政治家ではなく音楽家が発信できればもっと良いと思うんです」。

正午に開演してからライブが終わる19時頃まで、最前列で音楽に沸き返る観客もいれば、屋台で買ったフードやドリンクを食べ歩く人、レジャーシートを広げて寝転がって音楽を楽しむ人もいる。

「ライブに参加してくれるミュージシャンには、大先輩であろうと毎回『究極のBGMだと思ってやってください』と伝えています。お客さんが主役だから。お客さんが万博公園でピクニックをしていて、ふと気づいたら極上の音楽が流れている。そんなイメージで、16年間変わらず続けています。家族の夏休みの恒例行事にしてもらいたいですね」。

五感に響く音楽が、出演者と観客を一体に

情熱大陸ライブでは出演者同士のセッションも多く、ポップス、ジャズ、ブルース、そしてヴァイオリンと、様々なジャンルの音が重なってファンを魅了する。

夜風が心地よく吹き始めるフィナーレには、「情熱大陸」を全出演者で演奏するのが恒例で、このとき会場の熱気は最高潮に達する。

「他のフェスでは、自分の出番が終わったら帰るのが普通。実は普段からミュージシャン同士が出会う機会は少ないんですよ。だから、事務所やレーベルを超えて音楽家同士が交流して、そこからまたクリエイティブなものが生まれる場にしたいと思っています」。

ジャンルの括りを超えた音楽が五感に響き、ミュージシャンと観客が一体となって音楽に酔いしれる「お祭り」は、最高の夏の思い出になるはずだ。

and more(順不同)

アサヒビール presents
情熱大陸ライブ 2017
supported by MAZDA

- ●開催日：2017年7月22日(土)
  開場11:30/開演13:00(終演予定19:00)
- ●会場名：大阪 万博記念公園もみじ川芝生広場
- ●主　催：MBS　●特別協賛／アサヒビール
- ●チケット料金(レジャーシート付・自然文化園入場料込)：
  ブロック指定 8,800円、小学生 1,200円
  ＊未就学児入場無料　＊小学生、未就学児は保護者と同伴入場。
  小学生 1,200円 小学生・未就学児は、保護者と同伴入場。
- ●チケット発売日：2017年5月27日(土) 10:00～

http://www.mbs.jp/jounetsu/live/2017

イベント専用駐車場はございません。公共の交通機関をご利用下さい

葉加瀬太郎さん
スペシャルインタビュー
第2弾
「少年時代・津雲台」編
はコチラから

行こうよ！

大阪万博にタイムスリップ

EXPO'70パビリオン

vol.22 特別編

現在開催中の企画展「The Legacy of EXPO'70 建築の記憶―大阪万博の建築」。この展覧会では大阪万博開催の記録だけではなく、構想段階の設計図や模型写真、建設現場記録といった貴重な資料を中心に、開催までのプロセスや閉会後のありようを紹介しています。

今月号は特別編として、この企画展を監修した橋爪紳也氏のインタビューをお届けします。

取材／編集部 吉見梨恵

企画展「The Legacy of EXPO'70 建築の記憶―大阪万博の建築」

- 日時 » 7月4日(火)まで　10時～17時(入館は16時半まで)
  水曜休館(5月9日(火)までは無休)
- 会場 » EXPO'70パビリオン(万博記念公園 自然文化園内)
- 観覧料 » 一般400円　中学生以下無料
  ※ただし、常設展入場券200円を同時にお買い求め頂いた方には、100円引き
  ※別途自然文化園入園料が必要

EXPO'70パビリオン
06-6877-4737　公式Facebookに「いいね！」しよう

橋爪少年が見た大阪万博とは、どんな印象でしたか？

当時は阪急千里線に「万国博西口」駅という仮設駅があって、そこに近づくと住友童話館や自動車館、松下館が見えてくるんですよ。見えただけでもワクワクして、思わず走り出してしまいましたね。会場では、スタンプを集め、外国人を見ればサインをもらい、会場内を走り回っていました。普段の暮らしとは全く違う、見たこともない別世界がそこにありました。また、博覧会目当てに日本各地から知らない大人たちが、我が家に泊まりに来たことも博覧会の思い出(笑)。毎週のように親戚やその親戚、親の仕事の得意先の人など、日本各地の人たちと博覧会に行っていました。その数18回くらいかな。

実家が建築塗装会社で、博覧会の建造物を塗装したらしく、「これはうちが塗ったんや」と父が言うと子どもながらに誇らしく思いました。建築の世界を垣間見た気がして、「面白い」と思うようになりましたね。

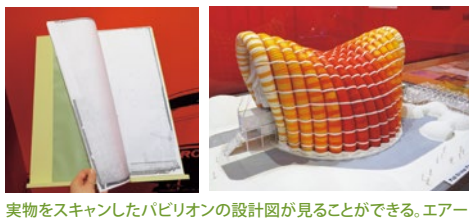
万博後に普及した斬新な建築アイデア

この博覧会では、斬新な発想で建築物が創造されました。黒川紀章氏が設計を手掛けた「タカラビューティリオン」は、カプセル型の部屋をつなぎ合わせることで全体を構成する、というユニット型の建造物です。「メタボリズム(新陳代謝の意)」と言われ、カプセル、ユニットをどんどん作ってつなぎ合わせていき、いらなくなったユニットは取り替えれば良いという、可変性の高い建築を提案しました。こういった斬新な建築のアイデアが博覧会で示されて、新しいビジネスを考えられた方が多々いるといいます。大阪で誕生した世界初となるカプセルホテルがその例です。この企画展は、博覧会に関心のある方だけでなく、建築やデザインに興味がある方にもぜひご覧いただきたいですね。

また、今回の企画展では、竣工時のプレスリリースやパビリオンの設計図など、今までに紹介されることがなかった資料も紹介しており、試行錯誤や工夫をしながらいかに博覧会を作っていったのか、という「作り手」側の博覧会を見ていただきたいと思っています。

橋爪紳也氏
大阪府立大学大学院経済学研究科教授
大阪府立大学観光産業戦略研究所長
企画展「The Legacy of EXPO'70建築の記憶―大阪万博の建築」を監修

パビリオン各社が記者などに向けて発信した当時のプレスリリース。一般に目にすることがない貴重な資料で、パビリオン参加者からの未来に向けての強いメッセージが感じられる。



実物をスキャンしたパビリオンの設計図が見ることができる。エアードームやつり構造といった、施工方法に特徴があるパビリオンの珍しい施工図書と模型を比較して見るのも面白い。

従来の建物は現場生産だったものを、「タカラビューティリオン」で建築の工業化の形を示した。その建設映像も紹介されている。